

史料紹介と研究

東京大学所蔵の二つの「ブロムホフ家族図」

松井 洋子・高島 晶彦

はじめに

東京大学総合図書館と史料編纂所には、ともに長崎の出島出入りの絵師川原慶賀の作といわれる、それぞれ異なるオランダ商館長コックIIブロムホフの家族図が所蔵されている。

史料編纂所の画像史料解析センタープロジェクトの一つとして、日蘭関係と関わる種々の画像史料について検討するため、筆者らは二〇一五年一月九日に、当時のプロジェクトメンバーおよび日蘭関係の研究者に、本史料保存技術室員、修補技術者も交えて、二つの家族図とその他の近世後期対外関係資料を見る研究会を開催した^①。その際、両図とも、かなり傷みが進み、なるべく早い修理が必要であることが判明した。

そこで、まず総合図書館所蔵図について、同館から公益財団法人出光文化福祉財団の平成二十七年（二〇一五）度美術品修復助成に応募し、助成を得た（平成二十八〜二十九年度実施）。史料編纂所所蔵図については、同じく出光財団の平成三〇年（二〇一八）年度助成によって、修理費用の一部の補助を受け（令和元〜二年度実施）、これにより両図の修理を行なうことができた。助成をいただいた出光文化福祉財団に、改めて謝意を表したい。

修理は、二点とも株式会社修護（代表取締役 池田和彦）により、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所修復アトリエ（紙）において、同社の君嶋隆幸氏（一般社団法人国宝修理装潢師連盟認定技師長）、白井啓太氏（主任技師）を主担当者に行なわれた。

なお、二点とも修理開始の前に、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所（保存科学研究センター早川泰弘氏ほか）と東京大学の共同研究とし

て彩色分析等の科学的調査が実施された。

本稿では、松井がこの絵画の成立背景および二点のそれぞれについて判明している来歴や特徴、修理の概要を記し、現在判明している同画題の絵画の類型の中での位置づけを検討する。また高島が補論として、修理の過程で判明した両図についての知見を紹介する。記述に際しては、（株）修護による「業務実績報告書」、東京文化財研究所による「和蘭甲比丹ブロムホフ家族図の彩色材料調査結果」を参照した。

一 ヤン・コックIIブロムホフとその妻子等の来日

ヤン・コックIIブロムホフ Jan Cock Blomhoff (1779-1853) は、オランダ王国東インド政庁下の、長崎出島所在の日本商館において、一八一七年（文化一四）から一八二三年（文政六）まで商館長を務めた。貿易の改善に努め、政庁主導の日本に関する調査・蒐集のさきがけにもなった人物で、オランダ通詞たちに英語を教えたことでも知られている（文献⑪）。

アムステルダムに生まれた彼は、フランス革命からナポレオン戦争に至るヨーロッパの混乱の時期に、十五歳で軍隊に入ってフランス革命軍と戦い、その後一八〇五年バタフィアへ渡った。一八〇九年（文化六）、日本商館の次席である荷倉役として初めて来日した。一八一三年、当時イギリスに占領されていたバタフィアから、出島商館接収のための船が送られると、ブロムホフは、商館長ドゥーフとともにその計画を阻止し、交渉のためバタフィアへ赴いた。同地で拘束され、イギリスに送還されたが、蘭英の講和によって釈放となり、オランダへ戻る。帰国後の一八一五年ティツィア・ベルフスマと結婚した彼は、翌年、バタフィアへ出発し、商館長の後任として一八一七年（文化十四）長崎へ再来した。その際に政庁の許可を得、妻と一歳半の息子、乳母、下女を同伴したのであるが、日本側はその滞在を認めなかった（文献④、⑪、⑮、⑳）。

妻子一行の出島への逗留は四か月足らずだったが、その間に、ブロムホフ一行の肖像が描かれた。実際に出島でこの家族を写生したのは、唐絵目利石

崎融思と出島出入り絵師川原慶賀⁽²⁾であるとされている(文献⁽¹⁸⁾)。

二 東京大学にある二つのブロムホフ家族図

1 伝川原慶賀『阿蘭陀加比丹并妻子等之図』 所蔵番号A〇〇―四六八四

(絹本着色、掛幅装、本紙縦五六・五cm×横九八・五cm)

東京大学総合図書館が所蔵する本図(「巻頭図」、次節掲載の表ではD図とする)は、横長で、向かって左端に椅子に座る男性、その右側に長椅子のわきに立つ白い帽子を付けた女性、長椅子に座る赤いドレスの女性とその足もとに立つ幼児、右端の床に座る黒髪で肌の色の濃い女性の五名の人物を描く。右下部に「崎陽」「東(あるいは来)賀」の落款朱印を持つ【図1】。

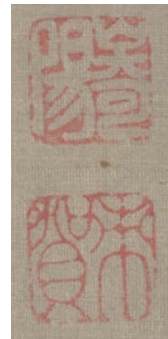


図1 (D図) 落款部分

「東/来賀」については、林源吉氏(文献⁽⁵⁾)、陰里鐵郎氏(文献⁽¹³⁾)、金井圓氏(文献⁽¹⁶⁾)が論じているが、いずれも慶賀のものとは結論付けている。

箱の蓋表面には「御掛物 阿蘭陀加比丹并妻子等之図 一幅」、箱の蓋裏には以下の墨書がある【図2】。

「加比丹やんこつくぶろむほふ歳三拾九、加比丹妻でつたべるふすま歳三拾壹、加比丹伴よわんねすこつくぶろむほふ歳式ツ、乳母ぷれとるねるらみゆんつ歳廿三、下女まらてい歳三拾三」、

「文政元戊寅歳夏阿蘭陀加比丹妻子等召連肥州長崎江致着船候、玆敷儀ニ付於 公邊人物寫茂被 仰付候由ニテ、右寫繪圖一枚御出入大通辞末 永甚左衛門公指上候事」。

図2 (D図) 箱蓋裏の墨書



諸先学が指摘するように、文政元年(一八一八)とするのは、前年の誤りであろう。この絵画の元絵は、彼女らが滞在していた一八一七(文化十四)年八月十五日から十二月四日の間に、公邊すなわち幕府・長崎奉行が珍しいオランダ人の妻子を描くことを命じて作成されたものと考えられる。墨書の後半については、微妙な表現だが、「作成された元絵の写しの一つを、出入りの大通詞末永甚左衛門から差し上げた」と読める。「御出入」という表現は、おそらく長崎の地役人が諸藩の長崎蔵屋敷に出入りし情報提供や蔵屋敷の業務への便宜供与などの役割を果たす「館入⁽³⁾」を指すものと思われる、甚左衛門が出入り先の某大名家に差し上げた、と解釈することができるのではない。甚左衛門が大通詞であったのは、一八一八年半ばから一八三〇年、シボルト事件により「大通詞取放」になるまでである。出入り先がどこであるかは今のところ解明できていない。

この絵を収めた箱には、それが東京大学図書館の所蔵に帰した事情を伝える以下の付属品が同封されていた。

・東京帝国大学附属図書館の茶角封筒(付属品全体を収める)

(表書)「英国大使館一等通訳官C・R・Boxer氏書簡一通、小野塚喜平次氏・辻善之助氏書簡各一通、「和蘭カピタン妻子図」関係書簡(昭和六・十二月封入)」

・封筒

(表書)「清水直治殿」、(裏書)「東京帝国大学史料編纂所長 辻善之助」
封筒内には、次の二通

(書簡)「東京帝国大学総長法学博士小野塚喜平次書簡 清水直治殿宛、

昭和六年六月三十日付（所蔵の絵図借用につき礼状）

〔書簡〕東京帝国大学文学部史料編纂所長史料編纂官文学博士辻善之助書簡 清水直治殿宛、昭和六年六月三十日付（「大日本古文書幕末外国関係文書編纂上参考ノ為メ」借用の「阿蘭陀伽比丹妻子等図」返進と感謝を伝える）

・朝日新聞切り抜き（一九三二年（昭和六）七月二十一日十一面の記事）

・英文手書き短信 ボクサー氏 C. R. Boxer より中村勝麻呂博士宛、一九三一年七月二十八日付（同日付朝日新聞の記事についての連絡を謝し、今回の件が「終わり良ければすべてよし」であると信じていること、辻氏らの書簡二通を返却することを述べる。）

・蓋裏墨書の写真及び「和蘭甲比丹妻子等之図 一軸 河原慶賀画」と書いた紙

東京朝日新聞一九三一年（昭和六）七月二十一日十一面の「惜しや異国へ―南蠻畫の逸品 僅か千円で買はれ 東大中村博士等地圖踏む」との見出しの写真入りの記事が伝えるところによれば、約一か月前にこの絵が下谷の画商清水原泉堂に入った。史料編纂所の中村勝麻呂氏（当時史料編纂官）が借用検討し、慶賀によるオランダ商館長の妻子同伴時の絵であり、貴重な史料と判明したが、「貧乏な史料編纂所や帝国図書館には」すぐに代金を調達することができなかった。その間に長崎高等商業学校教授武藤長蔵氏の案内で中村氏を訪ねてこの絵を見たイギリス人ボクサー氏が買い取ってしまい、中村氏らは何とか取り戻すため種々奔走していたという。

同七月二十八日七面の続報（ボクサー氏の短信に言及されているものである）から、その後、清水の主人や武藤氏、中村氏と話をしたボクサー氏は、「是非大學で御入用ならば」と返戻の意思を示し、中村氏、鹽田氏、姉崎氏らの奔走により、帝大図書館へあてられた寄付金の内から千円が支払われ、この絵は買い戻されたことがわかる⁶⁾。

同封の東大総長、史料編纂所長の借用に関する書簡は、おそらく絵画とともに清水氏からボクサー氏に渡ったものが返却されたということであろう。

新聞が英国大使館付陸軍中尉で南蛮美術の収集家、と報じているボクサー氏とは、のちにロンドン大学教授となり、オランダやポルトガルのアジア海域における活動を中心に多くの著書を刊行し、日本に関わる研究も多い歴史学者チャールズ・ラルフ・ボクサー Charles Ralph Boxer (1904 - 2000)⁷⁾である。彼はその著書で、この絵について、自身が手に入れた事情にも触れつつ、当時の彼が知る少なくとも五件のバージョンの中で「最高の」「一目で名匠の仕事とわかる」ものだと語っている（文献⑦、一〇三頁）。

受け入れ当時、汚れや絵の具の剥離について、若干の補修がなされたようであるが⁸⁾、その後大掛かりな修理等は行なわれていない。

なお、今回の修理では、汚れの除去、絵具層の剥落防止、裏打紙の取替、欠損部の補填、折損の修復、補彩を実施し、掛幅装に仕立て直す、本格的解体修理を行ない、今後の保存のため太巻添軸と保存箱を新調した。表装の裂地、象牙の軸首は、すべて補修を行ない再使用した。汚れや折れ等の除去により、夫人の着衣や手袋、ブロムホフの着衣や履物の装飾、それぞれの目鼻立ちやほつれ毛に至るまで、精密に描かれた本図の細部が鮮やかにみえた。

2 伝川原慶賀「和蘭甲比丹ブロムホフ家族図」 所蔵番号S貴〇一―二三

（紙本著色、掛幅装 本紙縦一〇九・六cm×横四三・二cm）

東京大学史料編纂所が所蔵する本図（図3）、表のK図）は、縦長で、下部に向かって左から黒髪の女性、白い帽子の女性とその右腕に抱かれた幼児、青いドレスの女性の四名が描かれている。左下部に、D図と同じ「崎陽」「東（あるいは來）賀」の落款朱印を持つ（図4）。

中段に、描かれた四名の姓名や年齢がオランダ語と日本語で書かれ、上段には、来航の事情と、滞在を求める嘆願が却下され同年中に妻子らが帰帆した事情を示す、漢文の賛が見られる。賛の二つの印文については、上の

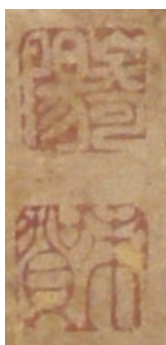


図4（K図）落款部分

図3 (K図) 和蘭甲比丹フロムホフ家族図 (東京大学史料編纂所所蔵)



文化丁丑七月三日、紅毛船舶帶妻及畫婢(辟) 児乳
母下婢以入港、蓋紅毛挈妻孥而航來未嘗有前蹤也、
是以使吏詰問之、對曰、本土地方戰爭累年、此年貢
獻闕焉、因官命曰、今也兵雖休矣、貢職不可、久負
緩罪、嚴然促航海、無奈發棹期逝而夙悉不起、官乃曰、
東洋遙矣、使家券(眷) 從事藥餌而就役、何病之憂
不瘳哉、於是不得固辭、挈妻孥服公幹、伏請俟明年、
更滿病瘳而帶歸本土、
府尹具狀轉 奏
江都、
令下不可、同年九月廿日、舊津萬里割情而歸云々、
惟極西文物之異、以丹青逼真、故記其大略以助弄覽、
寄陽 橘圃(團) 識 印 印

三十一歳
out 31 jaaren
Vrouw Titia Cok Blomhof
gebooren Bergsma
加比丹妻

一歳ト五ヶ月
ヨハネス
コック
ブロムホフ

oud 1 jaar
5 maanden
Zoontje Johannes Cok Blomhof

二拾三歳
プレトロネルレ
ミュンツ

oud 23 jaaren
Minnemoer Pretronelle Munts

三十三歳
マラティ
下婢

oud 33 jaaren
Meit Maratij

一文字は「山」「品」「参」、下は「謙」の可能性が指摘されている(文献⑩)が、筆者橘圃(あるいは橘團)については未詳である。

本図は、昭和六年十月に「大倉余資金」(補註)によって購入されたことされる。その事情については明らかではないが、D図購入の事情をも知る板沢武雄氏が昭和七年一月に発表した論文(文献④)において、中村勝麻呂氏の好意で見ることのできた「九州某氏所蔵の画幅の写真(ブロムホフ氏を除く四人の立姿)」から引用紹介するその題詞と人名書は、本図のものと同くじであり、本図が「九州某氏」から購入された可能性が考えられる⁹⁾。

眼球の着色は剥落がみられるものの、各人の表情や着衣の様子などはかなり細部まで描写されている。一方、下女の右手先が描かれていないなど、絵画として整えられていない点もある。また、姓名等の記述中にも、消して書き直したように見られる箇所が複数あり、絵画としての鑑賞を目的とした作品とは異なる印象を受ける。姓名等の蘭語記述、賛による事件の説明とセツトになった、ある種の情報記述としての絵画であったのかもしれない。賛については、一行の帰帆までを語っていること、九月二十日はオランダ船の規則上の帰帆期限に過ぎず、実際の出帆日ではないことなどから、絵や姓名等

より後で書き加えられた可能性も否定できない。

一九三七年に掲載された写真から、当時すでに下部には相当の傷みがあったことが判明する(文献⑧収載図)。購入後、修理等は行なわれておらず、開閉により絵具の剥離が進むことが危惧されていた。今回の解体修理によって、汚れやカビ痕の除去、絵具層の剥落防止、裏打紙の取替、折損の修復、欠損部の補填、補彩を実施し、裂地を新調して掛幅装に仕立て直し、装具・太巻添軸・保存箱等も新調した。

三、ブロムホフ家族を描く絵画の類型

ブロムホフの家族の来航、ことに西洋女性の姿は非常に注目を集めたようで、当局が絵師に命じて描かせたその姿は、様々な組み合わせで再構成され、肉筆画として、さらには長崎版画として全国へ流布した。現在もかなりのバリエーションが残っており、中には、本来誰の姿であったかを離れ、西洋女性、あるいは西洋の男女の絵として一般化されたものがある一方、全く異なる姿でありながらブロムホフ夫妻に仮託された図像も見られる。

ここでは、その中で、東大所蔵の両図に近い構成を持つ絵画について整理

表 ブロムホフ家族図の類型

図	作品名 (所蔵者・伝来)	類型 (人数)	材質	法量 (cm) (縦×横)	落款 / 印	配置(下線は座像) (向かっての左右を 記す)	主要出典 (太字、白抜 きは画像有)
A	Portrait of the Cock Blomhoff Family, their Wetnurse and two Enslaved Servants (アムステルダム国立博物館 NG-2008-64)	I (6人)	絹本	95.7×173.3	なし	左からブロムホフ・ 乳母・ <u>幼児</u> ・ <u>夫人</u> ・ 下女・後ろに下僕	⑭、URL*1
B	De heer Cock Blomhoff met zijn eerste echtgenote, mej. Titia Bergsma, en zijn zoon, later Mr. Johannes Cock Blomhoff (①によればオリジナルは mevrouw Fabius, geb. Van de Poll, te Amsterdam)	I (6人)	不明	不明	なし	左からブロムホフ・ 乳母・ <u>幼児</u> ・ <u>夫人</u> ・ 下女・後ろに下僕	①、②、④、 ⑦
C	[Dutch family at Nagasaki] (大英博物館 1881.1210.0.2756)	I / II (6人)	絹本	不明	なし	左からブロムホフ・ 少年?・ <u>幼児</u> を抱く 乳母左向き・ <u>夫人</u> ・ 下女	⑭、URL*2
D	阿蘭陀加比丹并妻子等之図 (東京大学総合図書館)	I (5人)	絹本	56.5×98.5	崎陽・束賀 (印)	左からブロムホフ・ 乳母・ <u>幼児</u> ・ <u>夫人</u> ・ 下女	④、⑦、⑧、 ⑫、⑬、⑮、 ⑰、URL*3
E	ブロムホフ家族図 (1937年東京伊藤忠孝氏所蔵)	I (5人)	絹本	53×99.5	崎陽・束賀 (印)	(⑧によればD図と 同一構図)	⑧(落款のみ 画像有)
F	ブロムホフ一家の図 (子孫 N.Blomhoff 氏)	I (5人)	絹本	不明	なし	左からブロムホフ・ 乳母・ <u>幼児</u> ・ <u>夫人</u> ・ 下女	⑮
G	長崎港図・ブロムホフ家族図(衝立の表裏) (池長コレクション→神戸市立博物館)	I (5人)	絹本	69.0×85.5	慶賀(帽子 型印)、 Toyosky(印)	左からブロムホフ・ 乳母・ <u>幼児</u> ・ <u>夫人</u> ・ 下女	⑤、⑥、⑦、 ⑧、⑨、⑫、 ⑬、⑮、⑰、 URL*4
H	Portret van de familie Blomhoff (ライデン国立民族学博物館 RV-5252bis-1)	I / II (4人)	絹本	75×80	石崎融思	左から <u>幼児</u> を抱く乳 母右向き・ <u>夫人</u> ・ 下女	⑫、⑮、 URL*5
I	Titia Cock Blomhoff, de bediende Marateij, het zoonkje Johannes Blomhoff en de min Petronella Munts (ライデン国立民族学博物館 RV-5824-17)	II (4人)	絹本	54.2×30.9	なし	左から <u>幼児</u> を抱く乳 母右向き・ <u>夫人</u> ・ 下女	URL*6
J	ブロムホフ家族図 (池長コレクション→神戸市立博物館)	II (4人)	紙本	90.0×28.1	石崎融思	左から <u>幼児</u> を抱く乳 母右向き・下女・ <u>夫</u> <u>人</u>	⑨、⑫、⑬、 ⑮、URL*7
K	和蘭甲比丹ブロムホフ家族図 (東京大学史料編纂所)	II (4人)	紙本	109.6×43.2	崎陽・束賀 (印)	左から下女、 <u>幼児</u> を 抱く乳母右向き、 <u>夫</u> <u>人</u>	⑧、⑫、⑮、 ⑰、URL*8
L	甲比丹家族之図(軸) (1932年大阪山田寅次郎氏所蔵)	II (4人)	不明	2尺1寸 ×1尺六寸	崎陽・束賀 (印)	左から下女、 <u>幼児</u> を 抱く乳母、 <u>夫人</u>	⑤、『明治以 前洋画類集』
M	ブロムホフ家族図 (早稲田大学会津八一記念博物館所蔵)	II (4人)	紙本	147.0×41.1	なし	左から下女、 <u>幼児</u> を 抱く乳母、 <u>夫人</u>	⑳ URL*10
N	甲比丹家族之図(軸) (1932年長崎小川水路氏所蔵)	II (4人)	紙本	不明	なし	(⑤によればL図と 同一構図)	⑤
O	阿蘭陀婦人と幼児の図 (1932年福岡許斐友次郎氏所蔵)	II (2人)	紙本	4尺4寸3分 ×1尺8寸	崎陽・束賀 (印)	(⑤によれば乳母が <u>幼児</u> を抱え直立)	⑤
P	ブロムホフ夫人図 (長崎歴史文化博物館 A2ハ0035)	II (2人)	紙本	85.0×46.5	田口之印・ 慶賀(印)	左から下女、 <u>夫人</u>	⑭、⑰、⑮ URL*9

網掛けは現存が確認できないもの。

主要出典については、画像掲載、絵画の内容の詳述があるものを掲げた。

URL*1 <http://hdl.handle.net/10934/RM0001.COLLECT.328423>

URL*2 https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_1881-1210-0-2756

URL*3 <https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/orandakapitan/page/home>

URL*4 <https://www.kobecitymuseum.jp/collection/detail?heritage=365039>

URL*5 <https://hdl.handle.net/20.500.11840/806902>

URL*6 <https://hdl.handle.net/20.500.11840/824911>

URL*7 <https://www.kobecitymuseum.jp/collection/detail?heritage=366551>

URL*8 <https://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w01/detail/full-disp/00011484?page=1&itemsperpage=200>

URL*9 <http://www.nmhc.jp/museumInet/prh/colArtAndHisGet.do?command=view&number=60293>

URL*10 https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg=%22subDB_id%22:%22141%22,%22id%22:%222964;1%22&lang=jp

しておく。【表】は、これまでの研究での写真掲載や叙述によって構成のわかる、肉筆の、ブロムホフの家族であることが明らかな絵画を整理したものである。

ブロムホフ家族図についての最初の専論（文献⑧）で、守屋謙二氏は、家族図を、(1)加比丹を加えた妻子等五人の図、(2)妻子等四人の図、(3)幼児と乳母のみの図、と分類しているが、人数とも密接に関わりつつこれらの図を分類する指標として、ここでは椅子・長椅子の有無と人物の配置に注目したい。仮に夫妻は椅子・長椅子に座り、幼児と白い帽子の乳母は立ち、黒髪の下女は床に座るものを〈I型〉、ブロムホフは描かれず、乳母が幼児を抱き、全員が立つものを〈II型〉とする。

〈I型〉

〈I型〉では、D図にみられるブロムホフ自身とその同行した家族等を示す五名構成が基本となる。

アムステルダム国立美術館所蔵のA図【図5】は、五名にさらに長椅子の後ろに立つ男性の下僕を加えた六名を描く。親族から売却されたもので、ブロムホフが最後まで手元に置いたものとされる。オランダ人の注文者によって、当時のオランダにおける東インドでの成功者の表象として「奴隸」を書き加えることが求められたのであろう。落款や書名はなく、慶賀または融思のものとしてされている。人数以外は全体にD図と酷似しているが、乳母の上衣の模様や夫人の指輪など、細部の描写には違いも見られ、また各人の顔の大きさや表情などは異なる印象を与えるものとなっている。

オランダの *Nederlandsch-Indië Oud & Nieuw* 誌が紹介するB図は、写真からは断定が難しいが、A図そのもの、またはその写しであろう。

大英博物館所蔵のC図【図6】は、長椅子などの基本的構図は同じで、川原慶賀の作と推測されている。ブロムホフ夫妻と下女の描き方はA図、D図と酷似するが、ブロムホフと乳母の間に、少年のように見える小柄な人物が立つ。衣服や表情は大人びて見えるが、背丈やしぐさは子供のようでもある

この人物が誰なのかは、手がかりがない。乳母は幼児を両手で抱き、二人は少年の方を向いている。イギリスの蒐集家ウィリアム・アンダーソンから一八八一年に購入されたもので、彼が一八七三年から一八八〇年の日本滞在から持ち帰ったものという。乳母が幼児を抱く点は〈II型〉と共通するものの、乳母と幼児の表現には他の図とは異なる独自の点が多い。

東京伊藤忠孝氏所蔵E図は、落款以外の写真が残っていないが、守屋氏の詳細な叙述（文献⑧）から、D図同様の寸法と描き方であることが知れる。ブロムホフ家に残るというF図も、構図や配色はD図と酷似するが、表情等細部には違いがみられる。

一方、一九三一年に池長コレクションに入った（文献⑨）G図【図7】は、最も知られるこの構図の作品であるが、縦横の比率、乳母のスカートの赤色が見えること、乳母の後ろの長椅子の足の形状など、他の〈I型〉図と異なる特徴がみられ、また、この画題の図で唯一「慶賀」[T'oyosky (トヨスキ)]の印を持つ。上部には「De Oprechte Atekening van het opper hoofd J:cock Blomhoff. Zyn vrouw en kind, die in Ao. 1818 al hier aan gekomen Zyn.」(一八一八年当地に到着した商館長ヤン・コック＝ブロムホフと彼の妻子の実写図)という題記がある。

ライデン国立民俗博物館が所蔵する「戊寅秋月 石崎融思照寫」の署名と印を持つH図は、長椅子の夫人と床の下女の部分は〈I型〉とほぼ同じながら、ブロムホフは描かず、乳母が幼児を右手に抱えて夫人のいる方を向いて立つ、〈II型〉との折衷的な構成となっている。

〈II型〉

幼児を抱く乳母と、緑または青系のドレスの夫人と、下女、全員が立っている〈II型〉図としては、K図のほかに、神戸市立博物館のJ図【図8】、(款記「文化丁丑秋照写於蜜首館長崎賞鑒家石崎融思」白文方印「融思字士齋」朱文方印「鳳嶺」)、ライデン国立民族学博物館のI図が現存する。共通する特徴は、上部に像主の名前を記す点である。



図5 (A 図) [ブロムホフ家族図] (アムステルダム国立美術館所蔵)
Rijksmuseum, Amsterdam.



図6 (C 図) [ブロムホフ家族図] (大英博物館所蔵)
© The Trustees of the British Museum. Shared under a CC BY-NC-SA 4.0 licence



図7 (G図) 長崎港図・ブロンホフ家族図
川原慶賀筆 (うち家族図) (神戸市立博物館所蔵)



図8 (J図) ブロンホフ家族図 石崎融思筆 (神戸市立博物館所蔵)

J図には、「蛮酋妻 名 Tetta perisma テッタペルスマ／かびたん
子性名 Johannes Cok Blomhoff ヨハンネス・コック・ブロムホフ／下女名
Maraly ムアラテイ／乳母 名 Pretorra Muts プルトラ ミュツ」(日本
語は朱)と書かれており、I図には、「Johannes Blomhoff 見よはねすぶろ
むほふ／Tetaperisma 嘉美丹婦人 てつたへるぶすま／Munne 乳母み
ゆんね／Maratey 婢女まらてい」(文化十四丁丑初秋渡来同年仲冬帰国)
とある。いずれも綴字及びびかな書きはK図に比べて不正確である。

現存を確認することができないが、林源吉氏(文献⑤)が紹介するL
図は、『明治以前洋画類集』にモノクロ写真が掲載されており、幼児の
服装やしぐさ、下女の右手先が描かれていないことなども含め、K図
と似た雰囲気を持つ。色はわからないものの、夫人のドレスの襟元や
裾のレース、乳母の上衣やエロンなどの表現においては、K図を含
むⅡ型Ⅴ図より、Ⅰ型Ⅴ図に近い。人名の記載はないが、上部に「In
Jappan boengua zieu Jonen / aankomende atfekening des vrouw zoonjie,
/ en minnemoer dienstmaagd van het opper / hoofd genaemt Jan Kock
Brouhof (日本 文化十四年来航 ヤン・コック・ブrouhofという名の商
館長の夫人、息子、乳母、下女の図)」と読めるオランダ語が記されており、
「崎陽」「東賀」の印がある。

M図は文字がなく、夫人のドレスはI型に近い一方、あやすような下女の

動きは他になく、それを見る幼児の着衣や表情はC図に近い¹⁷⁾。

N図については、現存が確認できず写真も残っていないが、林氏によれば、画面はL図と同一構図ながら、「印章はなく紙本淡彩の下絵」であるという。O図も現存が確認できず詳細は不明である。

夫人と下女のみP図は、兼重護氏(文献⑭、⑰)も指摘するように、より一般化された「西洋婦人」図として、後の時期に書かれたものである¹⁸⁾。

二つの類型の現存図の対比からは、単純な原本と写本の関係を見出すことは困難である。おそらくいくつかの本人たちを見てのスケッチをもとに、個々の人物の表現と細部の描写のパターンを組み合わせ、これらの絵が生み出されたものと考えられる。川原慶賀と石崎融思の絵が同じ構図、類似の細部をもって存在することは、同じものを見、あるいは同じ元絵を共有していたことを想像させる。

一般には慶賀の印として典型的なものではない「崎陽」「東賀」の印が、この題材を扱う絵の中では多数を占めていることは注目に値するが、慶賀の印が制作年代によって異なるのか、あるいは別の論理によって使い分けられていたのかについては、さらに検討が必要であろう。

おわりに

以上、現在確認できる限りの情報を整理してみたが、東京大学にある二種の絵画が、商館長プロムホフの妻子同行という事件を伝える絵画類型の中で、比較の基準となりうる研究上重要な位置を占める作品であることは間違いない。今後さらに、それぞれの絵の技法、依頼主、伝来、川原慶賀・石崎融思の画業の中での位置づけと様々な面からの説明が進むことを期待したい。デジタル画像の公開が進み、より広範に効率的に基礎的な情報を集約することが可能になりつつあるものの、最後は現物の絵との対峙である。その意味でも今回の修理によって、両図が閲覧可能なよい状態で次世代へと継承できることは喜びに堪えない。改めて関係各位に感謝したい。

(松井洋子・東京大学史料編纂所元教員)

補論 ブロムホフ家族図の修理における知見

C染色液呈色反応による顕微鏡検査 (JIS P8120)

「和蘭甲比丹プロムホフ家族図」(東大史料本)の本紙繊維は、C染色液呈色反応による顕微鏡検査(JIS P8120)により、灰青色を示し、細くて短いものが目立ち、全体に透明感がない。繊維の先端が尖っていて直線的な針状の形状である。また、のこぎり状の細胞はなく、俵型の薄壁細胞が見受けられることから竹繊維と判明した。

表面観察による外見的特徴について

「和蘭甲比丹プロムホフ家族図」(東大史料本)本紙の外見的特徴は以下の通りである。

一寸(三・〇三センチ)当たりの簀目の本数(漉簀のひごの目数)は、透過光下で三〇本、糸目の幅は一八ミリと細かい。

通常、糸目は上下方向、簀目は左右方向に走って見えるが、この場合は九〇度傾き、糸目が左右方向、簀目が上下方向に走っており、いわゆる「横使い」である。この「横使い」にすることにより、本紙に継ぎ目をつくることなく一枚で大きく画面を構成することができる。

また、繊維の分散を同じく透過光下で観察すると、かなり繊維が均一で緻密な面を構成している感じを受ける。

「阿蘭陀加比丹并妻子之図」(東大総合図書館本)紙の外見的特徴は、絹である。経糸・緯糸を九〇度傾けて使用する、いわゆる「横使い」である。本紙を「横使い」にすると通常の使い方に比べてしなやかさに欠けて硬い。そのため本紙に撓みと折れを生じさせ易い状況にあったといえる。

彩色材料の分析について

東京大学史料編纂所と東京国立文化財研究所との共同研究として、画材として使われた色材に対して蛍光エックス線および可視分光による分析を行

った。「和蘭甲比丹ブロムホフ家族図」(東大史料本)の分析結果は以下の通りである。

- ・赤は、水銀(Hg)を含む色材が大半を占めている。
- ・下女の衣の模様で使用されている青は、藍と考えられる染料系の色材が、夫人のドレスの青は、プルシアンブルーが認められた。
- ・プルシアンブルーは、一七〇四年にドイツで発見され、イギリスで製法が確立されたのち普及したものである。日本では一八二六年頃から清国がイギリスから仕入れたものを大量に転売するようになったのをきっかけに広く使われるようになった。葛飾北斎も「富嶽三十六景」などで使用している(国宝修理装潢師連盟『装潢文化財の保存修理 東洋絵画・書跡修理の現在』二〇一五年)。

- ・乳母の前掛けの黒色は、鉄由来(Fe)の色材である。
- ・白はカルシウム(Ca)由来の色材である。
- ・幼児の肩に掛けている布に使用されている緑色は、銅(Cu)と鉛(Pb)の色材を合わせたものである。
- ・夫人の髪飾りには金(Au)が、夫人および乳母の耳飾りには金(Au)・銅(Cu)・亜鉛(Zn)を含む色材が使用されている。
- ・夫人の髪、下女の右頬の影および上衣に使用されている茶系色は、藤黄と考えられる染料系色材と水銀(Hg)を含む色材の混色が認められた。

次に「阿蘭陀加比丹并妻子之図」(東大総合図書館本)の分析結果は以下の通りである。

- ・椅子に座る加比丹(ブロンホフ)の洋服は、水銀(Hg)由来の赤色材である。
- ・ソファアに座る夫人のドレスに用いられた赤は、水銀(Hg)由来の赤色材と染料系色材を使いその質感を表現している。
- ・加比丹の横に佇む乳母の上衣の模様と加比丹の靴は、染料系色材である。
- ・下女の衣と乳母の帽のリボンに用いられた青は、藍と考えられる染料

系の色材である。

- ・乳母のスカート及びソファアの黒は、鉄由来(Fe)の色材である。
- ・ソファアの脚に用いられた緑の色材は、ヒ素(As)のみが検出され、ヒ素由来の黄色材に染料系の青色材を混色したものと判断した。
- ・加比丹の服の装飾やソファアの袖模様に使った金色は、金(Au)・銅(Cu)・亜鉛(Zn)を含む色材が使用されている。
- ・椅子などに使われた茶系色は、ヒ素(As)・水銀(Hg)が検出され、ヒ素由来の黄色材に水銀(Hg)由来の赤色材を混色したものと判断した。
- ・下女の衣の模様に使われた紫色は、水銀(Hg)のみが検出されたため、水銀由来の赤色材と染料系青色材を混色したものと判断した。

装丁について

- ・「和蘭甲比丹ブロムホフ家族図」(東大史料本)は、筋回袋明朝仕立の形式をとるもので、総縁は本紙と同じ竹紙で金箔紙の筋を付けている。表具の端に付す明朝は朱染紙としている。
- ・軸首は利休型の紫檀軸である。
- ・袋明朝は草(輪褶・りんほえ)の形式、なかでも文人表具と呼ばれるものである(国宝修理装潢師連盟『装潢史』二〇一一年)。
- ・「阿蘭陀加比丹并妻子之図」(東大総合図書館本)は、三段表装行の形式をとる。一文字・風帯は茶地牡丹唐草文金欄、中廻は茶地鳳凰唐草文銀欄、天地は縹雲文緞子で、軸首は象牙軸である。
- ・行の表具は、「堂褶・どうほえ」、略して「堂補・どうほ」と言う。客間に飾る、世俗的鑑賞的な表具である(国宝修理装潢師連盟同前掲)。

以上、東大史料本・東大総合図書館本の「ブロンホフ家族図」における修理知見について述べた。

(高島晶彦)

【参照文献】

- ① P. H. van der Kemp, "Decima, tijdens Nederlands toevoeving aan Frankrijk" *Nederlandsch-Indië Oud & Nieuw*, 3e jaargang, 1918.
 ② Anne Hallema, "Een merkwaardige Kakemono", *Nederlandsch-Indië Oud & Nieuw*, 9e jaargang, 1924/1925.
 ③ J.C. Lamster, "Een derde "Blomhoff"-schilderij van Decima", *Nederlandsch-Indië Oud & Nieuw*, 10de Jaargang, 1925/1926.
 ④ 板沢武雄「鎖国時代における外国婦人の入国禁止について」『史学雑誌』第四三編 一—一九三二)。
 ⑤ 林源吉「町絵師慶賀」『長崎談叢』第一一輯 一九三二)。
 ⑥ 黒田源次「川原慶賀と田口盧谷」(同『長崎系洋画』創元社 一九三二)。
 ⑦ C. R. Boxer, *JanCompagnie in Japan, 1600-1817*. The Hague: Martinus Nijhoff, 1936.
 ⑧ 守屋謙二「川原慶賀筆プロムホフ家族図について」『美術研究』六五号 一九三二)。
 ⑨ 池長孟「市立神戸美術館収蔵南蛮美術総目録」(市立神戸美術館 一九五五)。
 ⑩ 兼重護「川原慶賀の洋画的要素について」『長崎市立博物館報』第一号 一九七二)。
 ⑪ 沼田次郎「和蘭商館長ヤン・コック・プロムホフについて」とくに洋学史との関連において」『長崎市立博物館報』第二六号 一九八六)。
 ⑫ 長崎市出島史跡整備審議会編『出島図』(中央公論美術出版 一九八七)。
 ⑬ 陰里鐵郎「川原慶賀と長崎派」『日本の美術』三三九号 至文堂 一九九三)。
 ⑭ 兼重護「シーボルトの絵師川原慶賀―その国内現存作品について―」『鳴滝紀要』第三号 シーボルト記念館 一九九三)。
 ⑮ 日蘭交渉史研究会訳注『長崎オランダ商館日記』七(雄松堂出版 一九九六)。
 ⑯ 金井圓「伝川原慶賀筆和蘭甲比丹プロムホフ家族図とその橋圍賛について」『東方学』第九十三輯 一九九七)。
 ⑰ 兼重護「シーボルトと町絵師慶賀」(長崎新聞社 二〇〇三)。
 ⑱ ルネ・ベルスマ(松江万里子訳)『ティツィア』(シングルカット社 二〇〇三)。
 ⑲ 磯崎康彦『江戸時代の蘭画と蘭書―近世日蘭比較美術史―』下(ゆまに書房 二〇〇五)。
 ⑳ 松井洋子「長崎出島と異国女性―外国婦人の入国禁止―再考」『史学雑誌』第一一八編 一—二〇〇九)。
 ㉑ 松井洋子「ヤン・コック」プロムホフの日本滞在」(松井洋子、マティ・フォラー責任編集)『人間文化研究機構・国立歴史民俗博物館・ライデン国立民族学博物館

編『ライデン国立民族学博物館蔵 プロムホフ蒐集目録―プロムホフの見せたかった日本』臨川書店 二〇一六)。

㉒ Marti Forrer, "The Japanese Collection of Jan Cock Blomhoff" (松井／フォラー前掲書)。

㉓ 植松有希、印田由貴子編『長崎版画と異国の面影』(板橋区立美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会 二〇一七)。

㉔ ヤン・デ・ホント、メンノ・フィツキ「一本の細い橋 美術でひもとくオランダと日本の交流史」(大阪大学出版会 二〇二〇)。

㉕ 松田清「桂川甫賢筆長崎屋宴会図について」『神田外語大学日本研究所紀要』二二号、二〇二〇)。

註

(1) 当日の参加者は勝盛典子(神戸市立博物館)、君嶋隆幸(修護)、石田千尋(鶴見大学)、西澤美穂子(専修大学)、イサベル・ファン・ダーレン(本所共同研究員)、本所より松方冬子、史料保存技術室の高島晶彦・山口悟史・村岡ゆかりの各氏と松井であった(所属はいずれも当時)。

(2) 石崎融思、川原慶賀ほか長崎の画家については、所掲参照文献のほかに、古賀二郎『長崎絵画全史』(北光書房 一九四四)、同『長崎洋学史』上巻(長崎文献社 一九六六)が包括的に言及している。文献⑱末尾には関連文献のリストがある。

(3) 山本博文『長崎開港日記―幕末の情報戦争』(筑摩新書 筑摩書房 一九九九)、木村直樹『〈通訳〉たちの幕末維新』(吉川弘文館 二〇一)。

(4) プロムホフの公務日記によれば、甚左衛門は一八一八年七月十四日に、大通詞末席に昇進したことを伝えるに出島に来ている(文献⑮、一五八頁)。

(5) 『犯科帳』によれば、甚左衛門の罷免は(文政十三)寅閏三月廿五日すなわち一八三〇年五月十七日だが、彼は(文政十一)子十二月廿三日(一八二九年一月二八日)に「同道人預」となっており、そこで大通詞としての実質的活動は終わっている。(森永種夫編『犯科帳』第八卷(犯科帳刊行会 一九六〇、三一頁)。

(6) 同館の図書原簿によれば、受け入れは昭和六年七月三十一日、「南加資金」(未詳)によるとされる。

(7) ボクサー氏については、高瀬弘一郎訳『キリシタン世紀の日本』(八木書店 二〇二)に付された訳者による伝記と業績についての解説を参照。

(8) 付属品新聞記事の裏面に、「昭和六年十月補修」と記されており、総合図書館 OPAC の書誌情報一般注記には、「汚れや絵の具の剥離あり(昭和六年十月補修)」との記事がある。

- (9) 板沢論文(文献④)によれば、「今度東京帝国大学に入った絵が新聞紙上の問題となつてから、更に中村勝麻呂氏の許に異なつた構図のものが二三報告せられた」と聞いたという。
- (10) 美術館のオンラインカタログの記述(表中のURL参照)では、息子のヨハンネス(Johannes Cok Blomhoff 1816-1900^{*} 図中の幼児)死去後、その妻(Sara Maria van de Poll 1823-1907)の手にあったが、Van de Poll-Wolters-Quina Stichting財団にゆだねられ、一九八七年同財団から国立美術館に寄託され、二〇〇八年に売却されたという。一九〇七年の売立目録 *Art japonais : peintures, estampes, livres, collections: Feu M. Jan Cok Blomhoff... R.W.P. De Vries, 1907* には「一番として」プロムホフ家族及び使用人の肖像、絹本着色「900 × 1650mm」が記述されている(文献②④、②⑤)。文献⑧はこれを、結局売られることなくプロムホフ家に伝わったE図の記述とするが、オランダ人の女中のほかに二人のジャワ人の使用人がいるとされる点及び寸法からすると、A図の可能性もある。
- (11) 上層の商館員たちはしばしば、個人的に東南アジア系の下僕(オランダ語史料では奴隸 *slaven*)を連れてきていた。オランダ東インド会社及び出島の奴隸については島田竜登「一八世紀末長崎出島におけるアジア人奴隸―オランダ東インド会社の日本貿易に関するひとつの社会的分析」(鈴木健夫編『地域間の歴史世界―移動・衝突・融合』早稲田大学出版部 二〇〇八)参照。
- (12) D図にはない指輪が、A図では、夫人の右手の人差し指と薬指に、C図では右手人差し指と左手薬指に描かれている。G図は左右の薬指に各一つ、H図は右手の薬指に指輪が見られ、E図は文献⑧によれば右手の二本の指に描かれていたという。
- (13) 文献①二三九頁には、「オリジナルは van de Poll 家出身のファビウス夫人が保管している。het origineel berust bij mevrouw Fabius, geb. van de Poll」である。文献④はそれを Neuwenkamp 氏所蔵とするが、確認はできなかつた。
- (14) William Anderson, *A Descriptive and Historical Catalogue of a Collection of Japanese and Chinese Paintings in the British Museum*, Longmans, 1886.
- (15) 池長氏の解説によれば、慶賀がシーボルトに贈り、シーボルト事件の際奉行所が没収したものを、後に奉行の侍医北川某が伊勢に持ち帰つたものとされる(文献⑨五九頁)。一方、増田廉吉編『長崎南蛮唐紅毛史蹟』第二輯(長崎史蹟採集会 一九二九)は大阪市小林三郎氏所蔵とし(文献⑩)、文献④は小林三郎氏所蔵とする。
- (16) 京都博物館『明治以前洋画類集』(平安精華社 一九二五)五四―二図。
- (17) M図は画家富田万里子氏のコレクションで、早稲田大学に寄贈された(富田万里子「阿蘭陀関連資料と私の人生」(シンポジウム「早稲田大学所蔵史料に見る日

『正倉院東大寺宝図』画像のウェブ公開について

京都大学附属図書館所蔵の『正倉院東大寺宝図』ほかの画像が、所蔵館の貴重資料デジタルアーカイブよりウェブ公開されました。

『正倉院東大寺宝図』(請求番号 8-41/シ/1 貴別)

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013570>

『正倉院御寶物之圖』(請求番号 8-49/シ/1 大別)

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00033838>

『正倉院寶物圖』(請求番号 8-52/シ/2)

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00033839>

撮影には画像史料解析センターの正倉院宝物図プロジェクトが協力し、本誌 98 号(2022 年 10 月)でその概要を紹介しています。なかでも『正倉院東大寺宝図』は、明治 8 年(1875)に嵯川式胤を中心に実施された正倉院宝物調査において作成された模写・拓本類であり、明治初期の文化財調査の在り方を知る上でも貴重な史料といえます。ぜひともご活用ください。(稲田奈津子)

- 蘭関係史研究の今後―洋学文庫、富田万里子コレクションを通じて―報告」『会津八一記念館研究紀要』第一九号 二〇一七)。
- (18) 本稿では触れることができなかったが、慶賀は他に、ピアノを弾くプロムホフ夫人の図の下絵(文献⑩、竹内有一「文化一四年のピアノ奏図―日蘭交流の舞台裏―」『国立音楽大学研究紀要』第三七号 二〇〇二)、Toyosky の署名があるプロムホフ夫人がモデルと思われる赤いドレスの女性と特にプロムホフと特定できない帽子のオランダ人男性に少し成長した男児の三人の家族図(文献②③)等も残している。
- (補註)「大倉奨學資金 昭和五年十二月大倉象馬氏ヨリ大日本史料編纂二資スベキ圖書購入費ニ充ツルタメ金壹千圓ヲ寄附セラル」(東京帝国大学文学部史料編纂所『史料編纂所一覽』一九三七)。